イエスのことば　第9回

□文脈の確認

1. メシアはユダヤ人の王として来る（マタ2：2)。そしてメシアの王国では、ユダヤ人のみならず、全世界を治める。
2. イエスをその王である、と神が認めた出来事が、3つ続いて起きた。
   (1) イエスがヨルダン川で先駆者ヨハネから洗礼を受けたときに、聖霊なる神が鳩の姿で現れ、父なる神の声が天から響いた。
   (2) イエスが、荒野で40日間、サタンの誘惑を受けて、これを退けた。
   (3) 先駆者ヨハネが、荒野から戻って来たイエスを指して、メシアであると証言した。
3. 第三の出来事に続いて、イエスの初期の弟子たち5人がそろった。
4. 先駆者ヨハネの証言から7日目、ある婚礼の祝宴で、イエスは最初の奇跡を行った。
5. 婚礼の祝宴に出席した後、イエスは母や弟たち、そして5人の弟子たちといっしょに、ガリラヤ湖畔の町カペナウムに下って行き、長い日数ではなかったが、そこに滞在した（ヨハネ2：12)。メシアとして立つ前の、最後の家族旅行であった。
6. カペナウムに滞在して「長い日数ではなかったが」、春の過越の祭りが近づいた。
7. 紀元27年の春、イエスは、5人の弟子たちを連れてエルサレムに上った。神殿域に入ると、そこにいた商売人たちを追い出して神殿を一時占拠し、自分がメシアであると宣言した。そして、過越の祭りの期間中、多くのしるしを人々の前で行った。
8. そのようなしるしを見た人々の中に、ユダヤ教パリサイ派の有力者のひとり、ニコデモがいた。イエスに面会を求めてきたニコデモに応じて、イエスは、御霊によって新しく生まれることが、神の国に入るために必要であることを教えた。・・・第7回は、このニコデモとの対話の中での、イエスのことばを取り上げた。
9. この後、先駆者ヨハネがガリラヤとペレアの領主ヘロデ・アンテパスに逮捕され、ヨルダン川東側のペレアで牢に入れられるという事件が起きた（ルカ 3：19～20、マタ14：3～5、マルコ6：17～20)。ヘロデ・アンテパスは、ヘロデ大王の4番目の妻の子。
10. イエスは、ユダヤを去って、再びガリラヤに向かった（ヨハネ4：1～5)。そのとき、イエスと5人の弟子たちは、「サマリアを通っていかなければならなかった」(4節)。ペレアを通るのは避けたためである。前回のイエスのことばは、そのサマリアでの、ひとりの女性との対話であった。
11. 本日のイエスのことばは、2つ
    (1) サマリアの女性との対話のあと、続いて弟子たちにイエスが語られたことば
    (2) サマリアからガリラヤに戻ったあと、イエスが宣教を開始したときのことば

「わたしはあなたがたを、自分たちが労苦したのではないものを刈り入れるために遣わしました。ほかの者たちが労苦し、あなたがたがその労苦の実にあずかっているのです」（ヨハネ4：28）

この時からイエスは宣教を開始し、「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」と言われた。（マタイ4：17）

□本日のアウトライン

A) サマリアでの受容（ヨハネ4：27～42）

B) ガリラヤでの受容（ヨハネ4：43～45）

C) 宣教開始（マタイ4：12～17）

A) サマリアでの受容（ヨハネ4：27～42）

(1) 弟子たちが町から戻って来た（4：27）

(2) サマリアの女は町へ行き、町の人々に「あの方は私がしたことをすべて私に話した」と証言し、メシアかもしれないと伝えた。人々は町を出て、イエスのもとに向かった（4：28～30）

(3) その間、弟子たちとイエスとの対話（4：31～38）

① 31節　弟子たちは買ってきた食べ物を差し出し、イエスに食べるように勧めた。

② 32～34節　イエスは霊的な食べ物について弟子たちに語った。「わたしの食べ物とは、わたしを遣わされた方のみこころを行い、そのわざを成し遂げることです」

③ 35～36節　「目を上げて畑を見なさい」、このときイエスは、こちらに向かって来ている町の人々を見ながら、弟子たちに語っておられる。「すでに、刈る者は報酬を受け、永遠のいのちに至る実を集めています。それは蒔く者と刈る者がともに喜ぶためです。」ここで「蒔く者」はサマリアの女、「刈る者」はイエス。

④ 37節　伝道の原則　「ですから、『一人が種を蒔き、ほかの者が刈り入れる』ということばはまことです。」

⑤ 38節　「わたしはあなたがたを、自分たちが労苦したのではないものを刈り入れるために遣わしました。ほかの者たちが労苦し、あなたがたがその労苦の実にあずかっているのです」

- 「ほかの者たち」・・先駆者ヨハネ、旧約の預言者たち
- 「あなたがた」・・・イエスの弟子たち
- 「あなたがたがその労苦の実にあずかっている」・・・ガリラヤに退く前、

ユダヤにおいて、イエスは先駆者ヨハネよりも多くの弟子を作ってバプテスマを授けていた。実際にバプテスマを授けていたのは、イエスではなく弟子たちであった（ヨハネ3：22～26、4：1～2）。

(4) 町の人々がイエスをメシアとして信じた（4：39～42）

B) ガリラヤでの受容（ヨハネ4：43～45）

(1) 43節　サマリアに2日滞在した後、ガリラヤに行った。

(2) 44節　故郷のナザレでは受け容れられないと語られた。

① まだこの時点では現実には拒否されてはいなかったが、イエスは宣教の拠点をナザレには置かず、カペナウムに置いた（次の項、C）の（3）にて）

② 【補足】その後、実際に、ナザレでイエスが拒否される事件が少なくとも2回、福音書には記録されている。

- 最初の拒否・・・ルカ4：16～31
- 最終的な拒否・・マタイ13：54～58、マルコ6：1～6

(3) 45節　ガリラヤの人々は、過越の祭りのときにエルサレムでイエスがした奇跡を見ていたので、イエスを歓迎した。

C) 宣教開始（マタイ4：12～17）

(1) 12節　過越の祭のときエルサレムでメシア宣言し、その後ユダヤに滞在していたイエスが、ユダヤからガリラヤに退いた理由は、「ヨハネが捕らえられたと聞いたから」（参照、ヨハネ4：1～4）

(2) マタイ4：12と4：13の間に、「サマリアの女との対話」、そして「サマリアでの受容」という出来事があった。

(3) 13～16節　イエスは、故郷のナザレを離れ、ガリラヤ湖のほとりの町カペナウムに来て住んだ。

(4) 17節　宣教開始　この時からイエスは宣教を開始し、「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」と言われた。

① このことばの意味内容について、イエスは特に詳しく説明をしていない。聞いた人々からも質問は出ていない。旧約預言の中心テーマは、神の国、その王はメシア。

② 先駆者ヨハネの宣教（マタイ3：1～2）のことばと同じ

- そのときの人々の反応は、マタイ3：5～6　「自分の罪を告白し」
- ユダヤ人の指導者層に対しては、マタイ3：7～12
  - 「われわれの父はアブラハムだ」と心の中で思ってはいけません。
  - 麦（信者）を集めて倉に納め・・・「倉」は「天の御国」＝メシアの王国

- ➢ 殻（不信者）を消えない火で焼き尽くす・・・「消えない火」は永遠の滅び、黙20：14「火の池、第二の死」

③ マルコ 1：14～15　ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べ伝えて言われた。「時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」

- 14節「神の福音」
- 15節「時が満ち、神の国が近づいた」
- 15節「悔い改めて神の福音を信じなさい」

④ ルカ 4：14～15　イエスは御霊の力を帯びてガリラヤに帰られた。するとその評判が周辺一帯に広まった。イエスは彼らの会堂で教え、すべての人に称賛された。

(5) イエスの宣教の内容

① 宣教の内容は、二つである

- 「悔い改めなさい」（マタイ 4：17）、「悔い改めて福音を信じなさい」（マルコ 1：15）
- 「天の御国が近づいたから」（マタイ 4：17）、「時が満ち、神の国が近づいた」（マルコ 1：15）

② ルカ 4：43では、一言で「神の国の福音」と呼んでいる。

③ マタイは、ユダヤ人向けに福音書を書いたので、「神」という用語を避けて「天」と言い換えている。「天の御国」と「神の国」は、福音書の中では、同じ意味である。

④ 神の国とはどういうものか、先駆者ヨハネもイエスも詳しく説明をしていない。宣教のことばを聞いた人々から質問も、ない。神の国とは、旧約聖書で預言者たちが預言し、当時のユダヤ人たちが待望していたメシアの王国を指していたことが明白だったからである。

⑤ 福音とは、良い知らせである。マルコ 4：17が言う「福音を信じなさい」、この福音とは、メシアの王国がいよいよ近づいた、そして、その王となるメシアが現れた、そのお方はイエスであるという知らせである。

- メシアとは、ヘブル語で「油注がれた者」という意味。油は神の霊を象徴し、王となる者は即位にあたり、頭に油を注がれた。神の霊がその者の上にとどまり、神のみこころに従った統治をする、という意味。
- メシアを、ギリシヤ語でいうと、キリスト

⑥ 悔い改めよ、とは、考えを変えて罪びとであることを認めよということである。当時のユダヤ人たちは、モーセの律法を持つ特別な民であると自負していた。そしてユダヤ教パリサイ派では、ユダヤ人であれば、全員が神の国に入ることができると教えていた。

⑦　モーセの律法を持つだけで義人になるのではない。

- 律法による義は、それを完全に守って成り立つ（ロマ2：13）。
- しかし、それができる人は誰もいない。人間は誰一人、完全に正しい人などいない（ロマ3：20）。
- それゆえ、モーセの律法には罪をカバーするための動物の犠牲制度が定められた。モーセの律法は、本来、ユダヤ人たちに罪を教える養育係のようなものであった（ガラ3：24）。
- 律法を持つことを誇り（ロマ2：17）、儀式や食物規定を守っていくことでメシアの王国に入れると思っていたのは、ユダヤ人たちの考え違いであった（ロマ9：31～32，10：3）。

⑧　自分の行いを誇るのではなく、罪びとであることを認め、神の前にへりくだること、それが悔い改めるということである。

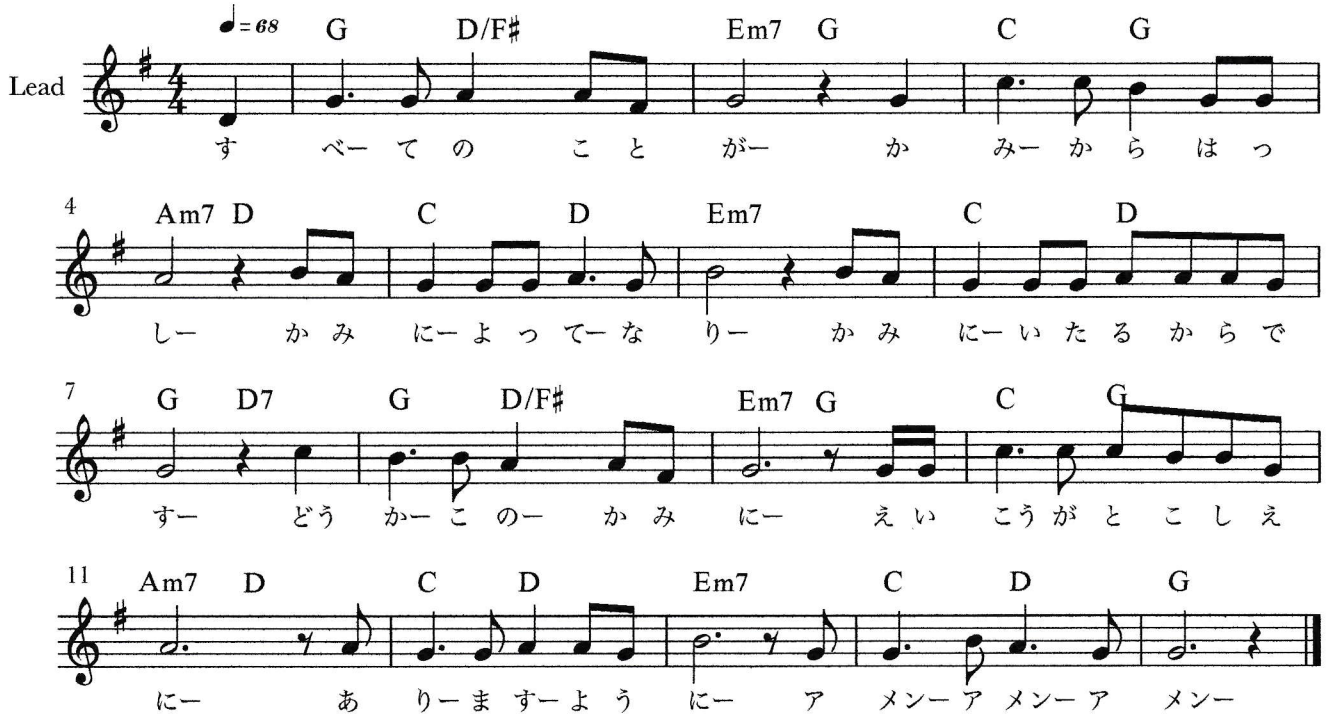
私は自分の罪をあなたに知らせ
自分の咎を隠しませんでした。
私は言いました。「私の背きを主に告白しよう」と。
すると　あなたは私の罪のとがめを赦してくださいました。

それゆえ　敬虔な人はみな祈ります。
あなたに向かって　あなたがおられるうちに。
大水は濁流となっても　彼のところに届きません。
あなたは私の隠れ場。
あなたは苦しみから私を守り
救いの歓声で　私を取り囲んでくださいます。

（詩篇32：5～7）

ローマ11:36

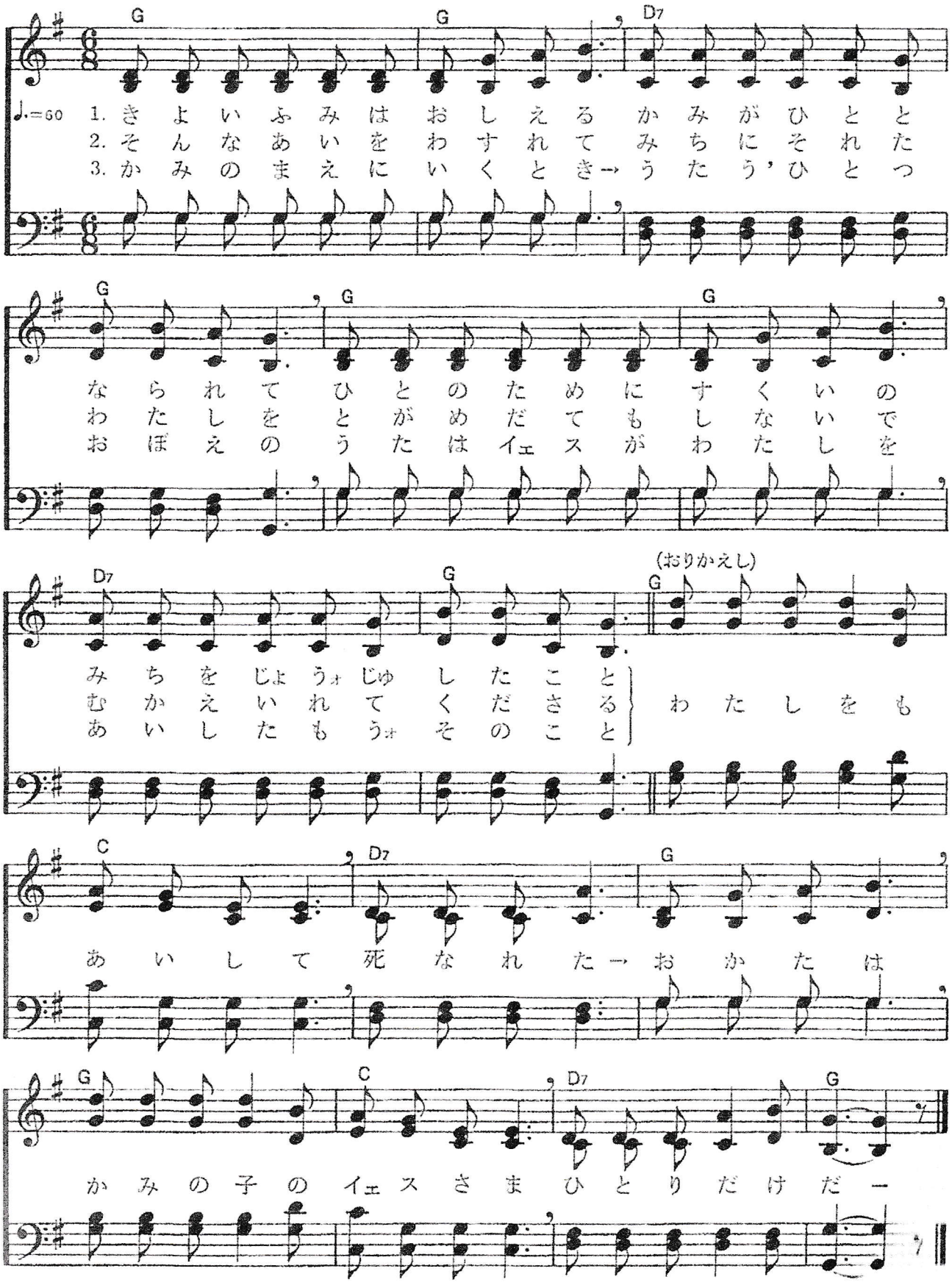
Samuel Kan



472 459 きよいふみは教える

〔救いの喜び〕

「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました」
（ヨハ15・9）

I am so glad that our Father
P. P. BLISS, 1838–1876 (UN)

JESUS LOVES EVEN ME
P. P. BLISS, 1838–1876